

算数・数学は問題が解けるとスカツとする。ストレス解消にはもってこいである。数学から離れてもう半世紀たつので、今更大学入試の問題を解こうなんて思わない。楽しみの一つにすればいいのであるが、解けないと悔しい。模試や定期試験の監督をしていて、数学の試験に当たると、解いてみようかという気になる。もちろん監督業務が最優先であるが、目の前で生徒が問題をスラスラ解いているのを見ると対抗心が燃える。

問題の中には私が高校の時にはなかったことも今は習っているようだ。例えば、「箱ひげ図」。データを大きさの順に並べ、25%ずつに分ける。上から25%と下から25%は線で表し、それ以外の50%の部分は長方形で表す。これがひげと箱に似ているのでこのような名称になっている。そして、上から50%目に当たる値を中央値とし、箱の中に線を引く。平均値と中央値が違うことが一目瞭然である。この図は統計で用いられ、分布を調べるときに便利らしい。調べてみると一九七〇年代に提唱されたとある。なるほど知らないわけだ。

今解いていておもしろいと思うのは中学入試の問題である。つまり算数。特に面積を求める図形の問題は毎回作問者に脱帽である。解説を聞くと、ひとつひとつは単純な定義や定理を組み合わせただけである。それを時間内に思いつくかどうかは練習量がものをいう。小学生恐るべし！

実は、高校生の時、文系・理系のどちらを受験しようか迷ったことがある。今と違い文系・理系のクラスの区別はなく、全員数学はⅢまで、物理も化学もやった。だから入試直前で文理を変更した人もいた。結局私は文系にしたが、この選択でよかったのか、大学を卒業して二十年近くもやもやとしていた。理系にしかなくてよかったと思ったのは、子供たちが大学で理系に進み、訳の分からない記号がいっぱい並んでいる数学を勉強していた時だった。私が理系に進んでいたら多分卒業できなかっただろうと確信した。今は算数を解くことで満足しよう。